NEAR News
●島根県立大学　北東アジア地域研究センター
Institute for North East Asian Research,The University of Shimane
第45号
2014.3.

唐に渡った北東アジアの知識人たち …… 1
新任研究員紹介 …… 4
サンクトペテルブルグを訪問して …… 5
中朝国境の動向に見る“北朝鮮” …… 6
第11回西周シンポジウム …… 8
NEAR 短信 …… 9
NEAR センター市民研究員活動の一覧 …… 12

唐に渡った北東アジアの知識人たち
（阿倍仲麻呂・円仁・崔致遠）
― 阿倍仲麻呂を中心に ―

島根県立大学副学長・NEAR センター研究員　**飯田　泰三**

１．日本で崔致遠について初めて論及したのは、今西龍「新羅崔致遠伝」（『歴史と地理』第２巻第６号、大正７（1918）年 12 月）であった。今西龍（1875 ～ 1932）は、日本の新羅史研究の草分け的存在であって、その出発点は、東京帝国大学大学院在学中の明治 39（1905）年、日露戦争終結直後に単身、新羅の旧都慶州を探訪したことにあったという。1926 年、京城帝国大学教授と京都帝国大学教授の兼任となった。上記の「新羅崔致遠伝」は、没後に編纂された『新羅史研究』（1933）に収められた。

しかしその後、崔致遠研究にはさしたる進展が見られず、周藤吉之の「新羅末の文士崔致遠伝－とくに同年進士の友顧雲の事跡について」、および「唐末淮南高駢の藩鎮体制と黄巣徒党との関係について－新羅末の崔致遠の著『桂苑筆耕集』を中心として－」（いずれも『宋･高麗制度史研究』（1992）に所収）などが目立つ程度であった。

だが 21 世紀に入って、徐々にではあるが、崔致遠に関心を持つ研究者が増えてきているかに見える。たとえば、平成 13 ～ 14 年度、九州大学人文科学研究院では共同研究「崔致遠撰『桂苑筆耕集』に関する総合的研究」がおこなわれ、その成果の一部として、竹村則行「新羅・崔致遠と晩唐・顧雲の交流について」（『文学研究』100、九州大学、2003・３）や、川本芳昭「崔致遠と阿倍仲麻呂－古代朝鮮･日本における「中国化」との関連から見た－」（『九州大学東洋史論集』31、2003・４）などが発表された。

２．私は、唐に渡った北東アジアの知識人として、崔致遠と比較・対照しながら論じてみる価値がある日本人が２人いると思う。阿倍仲麻呂と円仁である。

後者の円仁（794 ～ 864）は、最澄が開基した日本天台宗の第３世座主となる僧で、838 年、第 15 回目の最後の遣唐使節団の一員として入唐し、さまざまの苦難を乗り越えて、五台山と長安で天台宗義とならんで密教の大法を学び（→ 空海の真言密教（東密）に対する天台密教（台密）の導入）、847 年、張宝高ら新羅人の援助を得て商船で帰国した。

崔致遠が中国に赴いたのは 868 年である

から、そのわずか20年ばかり前の話である。円仁の９年間にわたる中国旅行の見聞は、その『入唐求法巡礼記』に具さに記録されており、とりわけ当時の新羅人が極東海上貿易の担当者となって、東シナの海上ないし沿海において華々しい活動を行っているさまや、中国社会に住む外国人の最大多数派として、中国の生活に入り込んで彼ら自身の活動を行っている状況が活写されている。（Ｅ・Ｏ・ライシャワー『円仁　唐代中国への旅』第８章「中国における朝鮮人」）

これはほぼそのまま、崔致遠が青雲の志をもって渡唐した時の状況であろう。すなわち、崔致遠の渡唐は、未熟な12歳という年齢にこそ不安はあっても、海上船舶のルートや在唐生活については、すでにかなり成熟したネットワークが確立していたとみられるのである。

３．阿倍仲麻呂（701～770）は、崔致遠渡唐の150年ほど前、717（養老元）年に遣唐使節団（第８回、遣唐押使･多治比県守、４船、総勢557人）の一員（留学生）として入唐した。12歳の崔致遠ほどではないが、17歳のまだ少年といってよい年であった。

そして長安の「太学」（四品・五品の貴族の子弟の行く学校。仲麻呂の父・船守は正五位上に叙せられており、唐の五品に相当）で学んだのち、開元６年（718）～15年（727）の間に科挙（進士科）に及第したと推定されている。仲麻呂のその後の任官歴から見て、科挙及第者としか思えない道を歩んでいるからである。（この及第が、崔致遠のような「賓貢」（外国から推薦された外国籍の貢士）としてのものだったかどうかは分からない。仲麻呂関係の資料には、その言葉は一切出てこない。）

科挙及第後、「校書」（書物の管理や高官の文筆を助ける係。正九品）に始まり、「左拾遺」（皇帝の日常に付き従って、行き過ぎのある場合には、時にそれを諫める役。従八品）などの官歴を経て、開元19年（731、仲麻呂31歳）に「左補闕」（左拾遺と似るが、皇帝の移動に伴って付き従う供奉や、皇帝の政治に行き過ぎがある場合にそれを諫める諷諫など、高い見識を持って皇帝に近侍する側近の官。従七品）に任ぜられ、以後も一貫して、玄宗皇帝に近侍する官位を歴任する。「儀王友」（玄宗皇帝の第12子である儀王の学友。従五品）などを経て、天宝12年（753、仲麻呂53歳）には「秘書監」（従三品。秘書省の長官で、文筆の官としては最高位）にまで登りつめた。

その間、天平５年（開元21年、733、仲麻呂33歳）、16年ぶりに遣唐使節団（第９回、遣唐大使･多治比広成、４船、594人）がやって来た。このとき仲麻呂は、老いた父母に孝養をつくしたいからと帰国を願い出るが、許されなかった。『古今和歌集目録』に彼がそのとき作ったという漢詩が載っている。皇帝への「忠」と父母の「恩」に引き裂かれながらの望郷の思いを詠ったものである。

４．さらにそれから19年後、天平勝宝４年（天宝11年、752、仲麻呂52歳）、聖武天皇から孝謙女帝に代わった日本から、遣唐使節団（第10回、遣唐大使･藤原清河）がやって来た。在唐36年になる仲麻呂は、遣唐使一行とともに帰国することを皇帝に願い出て、今度は許される。

753年の春、仲麻呂（中国名・朝衡または晁衡）の帰国に際しての送別の宴が、友人の文人官僚たちによって催された。吉川幸次郎の推定では、王維が送別宴の発起人で、儲光羲・劉長卿・趙驊・包佶らが参会して、詩を披露した。いずれも科挙（進士）及第の文人派官僚たちである。（進士科の科挙試験では、まず『礼記』もしくは『春秋左氏伝』と『論語』についての筆記試験である「帖経」が行われ、その及第者が「雑文試」という名の詩賦作成試験を受けることになっていた。科挙試験合格者は、詩文を作成する能

力によって官位を得た「文学用臣」なのであった。）

いま残っている詩は、・王維「送秘書晁監還日本国」、・趙驊「送晁補闕帰日本国」、・包佶「送日本国聘賀使晁臣卿東帰」である。また、当時長安に不在であった李白が、仲麻呂帰国の途次、遭難して死んだとの誤報を受けたとき詠んだ詩「哭晁卿衡」も残っている。さらに、仲麻呂自身の「銜命将辞国」という詩も残っている。これは、送別宴の主賓であった仲麻呂の答礼の挨拶ともみられる。

仲麻呂が唐の宮廷で活躍した時代、後の史家が盛唐と呼ぶこの時代は、詩人たちが己の才芸で詩を競い合う時代でもあった。宮廷の支配者たる玄宗その人が詩を好み、宰相も科挙の進士科に及第した、詩を得意とする文人官僚が就くこともあった時代である。彼ら文人官僚派（科挙派）は、貴族階級出身の政治家（蔭位派）や、宦官勢力と時に協力し、時に対峙しつつ、宮廷社会を生き抜いてきたのであった。

なお、王維の詩には、105 句・545 字に及ぶ長大な「序」がついており、これは送別宴の開催の前に、あらかじめ、出席予定者に示されて、この序に基づいて出席者たちが詩を作って、作を寄せたのではないかともいわれる。王維（701 ～ 761）は、李白が“詩仙”、杜甫が“詩聖”と呼ばれるのに対し、“詩仏”と呼ばれることがあるが、それは典雅な詩風に由来するとともに、彼が仏教に深く傾倒していたことにもよる。（名の維と字の摩詰とは、『維摩経』の主人公・維摩詰の名を分割したものである。）おそらく、その性格の類似と同年の好みもあって、仲麻呂と親交を結んでいたのであろう。ともあれ、科挙及第者の連帯感と詩友としての連帯感が、これら送別詩群の底に流れていた。

５．753 年 11 月 16 日、遣唐使一行は蘇州を出帆した。その前日、折から初冬の澄み切った空には満月が上り、仲麻呂は 36 年過ごした唐を離れて帰国する感無量の思いを籠めて、「唐土にて月を見てよみける」と題して、和歌を詠んだ（古今和歌集）。

天の原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　いでし月かも
（翹首望東天　神馳奈良辺
三笠山頂上　思又皎月円）

従来通り４隻の船（第１船：大使・藤原清河と阿倍仲麻呂ら。第２船：副使・大伴古麻呂と鑑真ら。第３船：副使・吉備真備と普照ら。第４船：判官・布勢人主ら）で出帆した一行だったが、11 月 20 日、暴風に遭う。そして第２・第３・第４船は、なんとか日本にたどり着き、古麻呂、真備、鑑真、普照らは帰国できたが、清河と仲麻呂を乗せた第１船は、漂流のすえ、年末年始ごろ、驩州（ヴェトナム北部ヴィン）に着岸するが、現地人との軋轢から、180 名の大半は殺傷ないし行方不明となり、清河・仲麻呂ら 10 数名のみが、755 年６月ごろ、やっと命からがら、長安に戻ることができた。

仲麻呂は、また、期せずして玄宗に仕えることになったが、不運は重なる。その半年後の 11 月に安禄山の乱が起きるのである。12 月に洛陽が陥落し、翌 756 年６月には長安も陥落して、玄宗は蜀都に難を逃れることになる。仲麻呂は玄宗とともに長安を脱出したとみられるが、このことが彼に幸いした。長安にいれば、一時的に権力を掌握した反政府グループ、いわば偽政府側に仕えることになり、乱平定後、偽政府協力者として失脚する羽目になったであろうからである。

その点、王維の場合は、755 年、給事中の要職に上っていたが、玄宗の長安脱出時に、そのあとを追いかけたが追いつけず、隠れていたところを安禄山の軍に囚われた。そして洛陽に移され、強要されて安禄山政権

の給事中に任じられる。757年、唐軍により洛陽が奪還されると、王維は唐に帰順するが、玄宗に代わって皇帝となった粛宗に、安禄山政府協力者として罪を問われ、太子中允に降格された。

仲麻呂は、760年（粛宗・上元年中）には左散騎常侍（従三品）から鎮南都護（正三品。もともと安南都護と呼ばれていたが、安禄山に苦しめられた粛宗が、「安」の字を嫌って、一時期改名したもの）として再びヴェトナムに赴き総督を務めた。結局、６年間もハノイの安南都護府に在任し、766年（代宗・広徳２年）、安南節度使を授けられた。最後は潞州大都督（従二品）を贈られている。結局、日本への帰国は叶えられることなく、770年（光仁天皇の宝亀１年）１月、長安で70歳の生涯を閉じた。

（本稿は2013年10月、中国・揚州大学でのシンポジウム「孤雲・崔致遠の国際性と東アジア」における報告に基づく。）

新任研究員紹介

NEARセンター研究員　**井上　厚史**

NEAR研究員は、2008年度以来、５年ぶり２度目の就任となる。その間、NEARは着実な研究成果を積み重ね、数多くのシンポジウムや研究員の旺盛な出版活動などを通して、今や新設公立大学の研究機関としては異例と呼べるほど国際的な知名度を獲得しつつある。そうした研究所に再び復帰できたことは、私にとって望外の喜びである。

私の研究生活は、日本の戦国武士がいかにして宋明理学を受容したかという修士論文のテーマに始まり、伊藤仁斎や荻生徂徠の日本古学派の思想史的分析を経て、現在朝鮮儒教の分析へと移行している。現在は、朝鮮儒学を代表する思想家である李退溪（1501 － 1570）に関する博士論文をまとめているところであるが、論文の構想が３年前にほぼ完成したものの、昨年来足踏み状態にあるのには理由がある。

1934（昭和９）年に、高田誠二・藤原一毅共著『日本の教育精神と李退溪』（朝鮮事情協会出版部）という、李退溪が日本の教育界に多大な影響を与えたことを喧伝した本が出版されたことが物語るように、李退溪は戦前から日本人によく知られていた。戦後にも、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（東京大学出版会）が日韓基本条約が締結された1965年に出版されており、李退溪は江戸儒学（日本朱子学）の教師として広く日本人に認知され、現在もそのイメージは確固たるものとして定着している。

しかし、阿部吉雄が「李退溪尊敬の事例」（第三篇第二章）で援用した松田甲（1864 － 1945）のテキスト（『日鮮史話』（1926 － 1930）、『続日鮮史話』（1931））には捏造があり、史実をそのまま記述したものではない。さらに、『日本の教育精神と李退溪』が書かれる以前、京城帝大教授であった高橋亨（1878 － 1967）を初めとする当時のエリートたちは、朝鮮蔑視の言説を執拗に再生産し、朝鮮のみならず日本国内や満州にまでばら撒いていた。そうした負の評価が逆転して李退溪尊敬の言説が作られ始めた背景には、日中戦争（支那事変、中国抗日戦争、1937 － 45）で頂点に達する近代日本人の中国に対する強烈な蔑視観が横たわっている。これら戦前の日本人が作り出した朝鮮観・中国観を見て見ぬふりをして、あたかも何事もなかったかのように李退溪あるいは朝鮮儒教について論じることは、よほどお目出

度い研究者でなければできないはずである。

ところが、現実には、今だに朝鮮儒教について論じられるとき、常に参照されるのは高橋亨「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」(1929) であり、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』であり、戦前に日本人知識人が作り出した朝鮮観の問題点に言及した研究が皆無に近いのはどうしたことだろう。

朝鮮儒教研究とは、すぐれて北東アジア的研究テーマであると同時に、近代日本人が作り出した知の体系（私はこれを「帝国的学知」と呼びたい）を解明する上で重要なテーマでもある。今回 NEAR 研究員２度目の就任にあたり、私はすぐれた研究員とともに、このテーマについてさらに深めてみたいと思っている。

北東アジアのフィールドから
～現地調査報告～

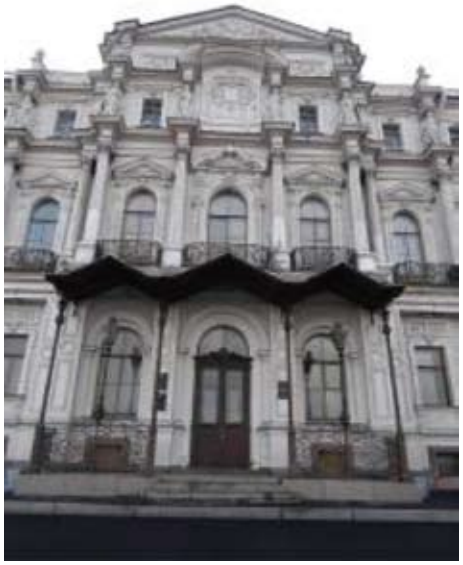
サンクトペテルブルクを訪問して

NEAR センター研究員　**井上　　治**

2013 年 9 月、わたしは、ロシアのサンクトペテルブルクにあるロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所図書館でモンゴルの古典籍を閲覧調査した。サンクトペテルブルクもロシアの学術機関も初めての訪問であった。

ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所図書館　全景
（撮影：筆者）

ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所の図書館は、帝政ロシア時代から積極的に進められてきた資料収集の成果が集中している、世界でもトップクラスの学術研究機関である。わたしが専門とするモンゴルの古典類に限っても、その蔵書の質量は世界一を争う所である。大学院生のころのわたしは、武者修行の目的の地としてここに憧れていた。それから 20 年近く経って、ようやく憧れの地で古典籍を見る機会を得られた喜びを表現することばはなかなか見つからない。



ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所図書館　入口
（撮影：筆者）

ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所では、事前の準備作業が十分になされていた。入り口を管理する女性はわたしの名前を見るとすぐに中に通してくれた。書庫の担当司書は、わたしが閲覧する予定の古籍をすべて事前に出庫してくれていて、司書が持っている帳簿にサインをするだけで閲覧させてくれた。文献の調査を進めてわかったのは、わたしがもっとも閲覧を希望していた１点の古籍が行方不明になっていることであった。わたしが把握していたのは、1960 年代の研究書に書かれている記号・

番号であったが、これに該当するものが存在しないというのである。担当司書は、わたしからの閲覧請求を受け取ってから何度もこの資料を探してくれたという。いつ頃から行方知れずになったのかもわからず、今のところは探求のしようがないらしい。きっと、わたしの知らない新しい記号・番号が付されて今も書庫のどこかにあるはずで、またいつか見つかることだろうと期待し、担当司書に感謝しながらその他の10点弱の古典籍の調査を進めた。

ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所図書館　閲覧室内部
（撮影：筆者）

初めてロシアの学術機関を訪問するに当たり、どのように手続きを進めるのか知らなかったわたしは、NEARセンター助手のバールィシェフ先生に全面的にお世話になった。訪問目的と期間を明記して受け入れを打診するNEARセンター長名の依頼状を先方の所長宛てに送ることや、ビザを申請するのに必要になる研究所からの招聘状発行依頼のやりとりは全てバールィシェフ先生に仲介に立ってもらった。結局は、招聘状発行作業に予想以上の時間がかかるため、観光ビザを取得してロシアに入ることになったが、この間も先方では作業を進めてくれており、現地に到着してから招聘状の現物を受け取った。ロシア内務省など関連諸機関の裁可を経てようやくこの書類が発行されることを知っていたこともあり、この書類１枚のために同僚と知人が割いてくれた労苦に、あらためて深く深く感謝せずにはいられなかった。

ここ５年ほど、自分に土地勘のないところでの調査をおこなっている。勝手のわからぬ初めての土地で、期待していた人々と会って対話したり、貴重な文献や資料を閲覧･収集したりできているのは、同僚･知人･友人の全面的な支援があってこそのことである。この間、何にもできない自分の無力さを恥じることが多いのだが、それ以上に、そのようなわたしを全力で支援してくれている仲間への感謝の念を強く感じているのである。

北東アジア時事通信

中朝国境の動向に見る“北朝鮮”

NEARセンター研究員　**福原　裕二**

2013年8月27日からほぼ一週間をかけて、1,300kmと言われる中朝国境を車で走破した。厳密には、12か所ある中国側の中朝口岸（出入国検査場）を点で結びつつ、舗装状態の良い道路を選びながらの移動である。その距離は3,000km以上にも及んだ。表１は、その12か所の口岸名、対岸の北朝鮮の地名などを整理したもので、図１は、それぞれの口岸（丸数字）の大まかな位置を地図上に落とし込んだものである。なお、口岸の等級の１級は外国人が通行可能な口岸であり、２級は中国・北朝鮮国籍者のみが通行可能な口岸である。

＜表１＞中朝口岸一覧

口岸名	対岸地名	口岸の等級と省名
鴨緑江岸（下流順）		
①丹　東	新義州	１級口岸：遼寧省
②集　安	満　浦	１級口岸：吉林省
③老虎哨	渭　原	２級口岸：吉林省
④臨　江	中　江	２級口岸：吉林省
⑤長　白	恵　山	１級口岸：吉林省
豆満江岸（下流順）		
⑥圏　河	元丁里	１級口岸：吉林省
⑦沙坨子	賽別爾	２級口岸：吉林省
⑧図　們	南　陽	１級口岸：吉林省
⑨開山屯	三　峰	２級口岸：吉林省
⑩三　合	会　寧	１級口岸：吉林省
⑪南　坪	茂　山	１級口岸：吉林省
⑫古　城	三　長	２級口岸：吉林省

＜図１＞中朝口岸の位置図

中朝は2012年８月14日、国境に近い北朝鮮の「羅先（ラソン）経済貿易地帯」と「黄金坪（ファングムピョン）・威化島（イファド）経済地帯」の経済特区の２か所について、管理委員会を設置することで一致し、実質的な開発段階に入ることを確認しつつ、インフラ整備や企業誘致の促進で合意するなどした。事実、黄金坪の南東には「安民臨時口岸」が設置され（図２）、その中国側では実質的運用を図るべく整地作業が進んでいた。また、そこから数km程度離れた場所には、高層アパートの一部を間借りする形で「中朝共同開発共同管理黄金坪経済区管理委員会」が開設されていた（図３）。だが、委員会に詰めているある職員によれば、「北朝鮮には開発の資力も意志も乏しく、整備や誘致も遅々として進まない状況だ」とのことであった。とはいえ、「計画建設局」というプレートが掲げられた委員会内の事務室には、２×３ｍ大の長方形の黄金坪の地図に道路網や電線の配線、各種施設などを詳細に記した青写真が置かれていた。それを基に開発が進められるらしい。極めて漸進的ではあるが、開発の手は緩んでいない。

＜図２＞安民臨時口岸

＜図３＞中朝黄金坪経済区管理委員会

長白山（白頭山）の南方約70kmに中朝国境の「長白」という町がある。そこでは、白昼堂々と北朝鮮側から鴨緑江を横切り、密輸品を運ぶ人を目にした（図４）。真夜中になると、今度は中国側から朝鮮族の人がそれを取りにやって来るという。多いときは、日中数度こうしたやりとりが行われるそうだ。この際、北朝鮮側から持ち込まれ

るのは、大抵木の実や根など、漢方の原料になる物品らしい（図５）。鴨緑江の北朝鮮側の岸辺には、数 100m 置きに歩哨舎があることを考えると、密輸は黙認されている。こうした取引を含め、長白では、口岸前で開門を待つ山積みのトラックが列をなしている光景を見たり、北朝鮮に建設現場指導へ赴く中国人労働者と出会ったりするなど、正規・不正規、多様かつ多層な中朝間の経済交流の奥の深さを実感することができる。

＜図４＞密輸品を対岸に運ぶ北朝鮮の人（長白）

＜図５＞北朝鮮→中国に運ばれる密輸品の一部

金正恩体制への移行後、彼自身が談話で「人民生活の向上」を強調し、経済建設に傾注しているのは最近しばしば報じられるところであるが、中朝国境における僅かな動向を見ても、これを裏付けるものがある。中朝国境ではまた、数度の申請の末にようやく親族訪問が認められ、中国で短期間の出稼ぎを行っている北朝鮮女性に会った。彼女は、「金正恩が人民の生活向上のため、国民を中国に行かせた方が外貨獲得にも繋がるから今回のような親族訪問が実現したのではと感じる」と語った。それはおそらく当を得ているのではないか。北朝鮮は決して自国の改革開放を口にはしないが、着実にしかし極めて漸進的に改革開放は進んでいるとみなしたほうがよいと思われる。

参加学会報告

第 11 回西周シンポジウム

NEAR センター長　**李　　暁東**

島根県立大学の憲章に、西周が標榜した“「純理の学」から「実践の学」にわたる諸科学の統合”が掲げられている。地域の先人の思想を継承すべく、本学の「西周研究会」は内外の第一線の専門家の協力の下で西周研究を地道に続けてきた。その一環として、2013 年 11 月 30 日に、津和野町森鴎外記念館で「西周と言葉の世界」と題する第 11 回目の西周シンポジウムを開催した。

今回のシンポジウムの開催に先立って、NEAR センターの客員研究員でもある沢目健介氏と菅原光氏が本学の浜田キャンパスで、それぞれ「西周入門」と「西周のオランダ留学」と題する講演を行った。講演を通して、西周に対する学生たちの理解が深まった。

シンポジウムでは、第 1 部は津和野町文化財保護審議会会長松島弘氏による講演である。津和野町の方々を交えて、NEAR センターの市民研究員をはじめとした浜田市民と本学の大学院生が多数参加したなかで、松島氏が「西周と日本の近代化」と題する講演を行った。氏は豊富な画像や史料を駆使して、岡熊臣や大国隆正、福羽美静等による「津和野本学」を中心に、津和野の重

厚な文化的伝統を背景にしながら、西周の思想形成の過程を辿った。さらに、氏は「軍人勅諭」を起草した西周に対する誤った理解をただし、日本の近代化過程における啓蒙思想家としての西周の位置を明らかにした。

第２部は「西周と言語」という視点から、相原耕作氏による「西周の日本語文明化構想－江戸時代の言語研究の視点から」と、蓮沼啓介氏による「西周と言葉の力」という２つの報告がなされた。

第１報告の報告者相原氏は、荻生徂徠や本居宣長を中心に、江戸時代の言語研究と政治思想との関係について優れた業績を重ねてきた気鋭な研究者である。氏は、「洋字を以て国語を書する」ことを主張した西周に着目し、それを西周の「西洋文明への同化の渇望」だとする考えに疑問を呈して、西周の主張は、文字改革の先に日本語を文明的な言語に改造するための文法構想を抱いていた点に、特徴があったと説いた。西洋近代思想の受容に積極的に取り組んだ西は、西洋の学問の精密さを支えるのは精密な言語であると認識した。そのため、彼は、日本語の「言文一致」の新しい文体を創出しそれに相応しい文法を構築する必要性を感じた。相原氏によれば、表音文字を使用しており、語形変化のある日本語は西洋語により近い、ということを認識した西の真意は、実は西洋語モデルの文法の構築によって、日本語の文明化を目指すことにあったのである。

第２報告を行った蓮沼啓介氏は西周研究の大家として知られている。氏は、西周思想を言語学の視点からアプローチし、言葉使いにおける「自然」と「作為」という観点から、文体、文字、文法、命題の選択について論じた。蓮沼氏によれば、精密科学の方法を探求した西は、四十七の和音を見極め、それぞれに一字の仮名を撰んで仮名の字形を画定した人物であり、仮名の視点からすれば、西は吉備真備と空海と肩を並ぶ存在である。さらに、彼は基本文法を発見した先駆でもある。また、論理学の面でも、西は命題の論理形式とは別に、命題の自然形式を提示した時代の先を行く先覚者であった。

両氏の報告は、従来の西周研究であまり注目されてこなかった側面に光を当てたもので、西周像をより豊かにした。以上の両報告に対して、会場から多数の質問がなされ、熱い議論が交わされた。

NEAR 短信
（2013 年 10 月～ 2014 年 3 月）

○島根国際学術シンポジウム 2013 の開催（主催・共催：島根県立大学・NEAR センター・神々の国しまね実行委員会）

【日　時】
2013 年 11 月 14 日（木）～ 15 日（金）
【場　所】
島根県立大学講堂
【テーマ】
「北東アジアの地域交流
　　－古代から現代、そして未来へ－」
【プログラム】
総合司会・李　暁東（島根県立大学）
11 月 14 日
挨拶・本田雄一（島根県立大学学長）
第１セッション「古代神話の世界と北東アジア交流」：報告①坂本　勝（法政大学）「記紀神話をどう読むか」、②飯田泰三（島根県立大学）「記紀神話における出雲神話の位置」、③魯　成煥（蔚山大学校）「韓国から見た日本神話」、④王　暁秋（北京大学）「古代中国人の日本認識」、コメンテーター・エルマコーワ・リュドミーラ（神戸市外国語大学）
第２セッション「鎖国時代の北東アジア交流」：報告①井上厚史（島根県立大学）「石

見への朝鮮漂流民について」、②付　勇（廈門大学）「中国漂着日本人への取り扱いに見る清朝時代の日中関係」、③マランジャン・カリネ（ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所）「日露関係史から－ロシア科学アカデミー東洋古典文献研究所の史料にもとづいて」、コメンテーター・池内　敏（名古屋大学）

11 月 15 日

第３セッション「北東アジア接壌地域の歴史と現状」：報告①井上　治（島根県立大学）「モンゴルから見た北東アジア接壌地域」、②尹　虎（清華大学）「図們江北岸地域の朝鮮系住民社会と日本」、③金　日宇（済州大学校）「高麗時代のモンゴルと済州の交流－それが今日の済州社会に持つ意味」、コメンテーター・福原裕二（島根県立大学）

第４セッション「現代～未来のアジア太平洋交流」：報告①西藤真一（島根県立大学）「極東ロシアのインフラ整備」、②久保田典男（島根県立大学）「中小企業の北東アジア戦略」、③赤羽恒雄（モントレー国際大学）「北東アジア地域の地域統合過程」、④ロニー・カーライル（ハワイ大学）「北東アジアにおける安全保障上の懸念と経済発展政策の相互作用」、コメンテーター・佐藤　壮（島根県立大学）

○たけしま（竹島・鬱陵島）をめぐる歴史と生活シンポジウム（主催：島根県立大学）の開催

【日　時】

2013 年 12 月７日（土）13：00 ～ 18：00

【場　所】

島根県立大学交流センター　２階
　コンベンションホール

【内　容】

開会挨拶・本田雄一（島根県立大学学長）

第１部「歴史から見たたけしま（竹島・鬱陵島）」：池内　敏（名古屋大学）「鳥取藩領民と竹島（鬱陵島）」、森須和男（NEAR センター市民研究員）「天保竹嶋一件と浜田藩」、福原裕二（島根県立大学）「たけしま（竹島・鬱陵島）に暮らした日本人」；

第２部「生活から見たたけしま（竹島・鬱陵島）」：西野正人（元日本海かにかご漁業協会会長理事）「日本海（東海）の暫定水域問題」、安達二朗（浜田市水産業振興協会参与）「竹島・鬱陵島と漁業との関わり」、渡邉祐二（裕丸漁業生産組合理事）「西部日本海（島根県海域）漁業の現状と課題」；

第３部「全体総括」：登壇者・岩下明裕（北海道大学）「ボーダースタディーズからみた竹島問題」

質疑応答：司会・李　暁東（島根県立大学）

閉会挨拶・飯田泰三（島根県立大学副学長）

○北東アジア研究会 2013 年度第４回例会

【日　時】

2014 年１月 14 日（火）10：00 ～ 12：00

【場　所】

講義・研究棟２階　会議室Ｂ

【報告者・テーマ】

尚　小明氏（北京大学教授）

「《21 箇条》交渉のもう一つのチャンネル
　　－総統府関連活動をめぐって－」

【討論者】

胡　連成氏（華僑大学准教授）

○第 34 回日韓・日朝交流史研究会／北東アジア研究会 2013 年度第５回例会

【日　時】

2014 年２月 12 日（水）16：30 ～ 18：00

【場　所】

講義・研究棟３階　大演習室２

【報告者・テーマ】

三村光弘氏（環日本海経済研究所）

「北朝鮮の新政権の経済政策と今後の見通し」

○島根県立大学・北京大学国際関係学院合同シンポジウムの開催

【日　時】

2014年２月14日（金）9：30～18：30
【場　所】
島根県立大学交流センター２階
　コンベンションホール
【テーマ】
「中国式発展の独自性と普遍性
　　－《中国模式》の提起をめぐって－」
【プログラム】
プロジェクト紹介･江口伸吾（島根県立大学）
開会の挨拶･本田雄一（島根県立大学学長）
基調講演①唐　士其（北京大学国際関係学院副院長）「『中国模式』再考」、②宇野重昭（島根県立大学名誉学長）「日本の内発的発展論から見る中国模式論－グローバル化急進展の時代に－」
第１セッション「中国における国家と市民社会」：報告①楊　朝暉（北京大学国際関係学院）「中国社会の転換期における中国共産党の指導」、②李　暁東（島根県立大学）「中国の『市民社会』をどのように語るか」、③江口伸吾「現代中国の国家建設と『公民社会』のガバナンス－近代化のプロセスと基層社会の変容を焦点にして－」、討論者・滝口太郎（東京女子大学）、司会・村井　洋
第２セッション「市場経済と格差」：報告①唐　燕霞（愛知大学）「『中国模式』の特殊性と普遍性－労使関係の視点から－」、②董　筱丹（中国人民大学可持続発展高等研究院）「1949年以来の中国都市・農村の市場化プロセス」、討論者・林　裕明（島根県立大学）、司会・木村秀史（島根県立大学）；
第３セッション「共振する中国と国際社会」：報告①梁　雲祥（北京大学国際関係学院）「『世界の中国』、それとも『中国の世界』か？」、②佐藤　壮（島根県立大学）「新興大国・中国と東アジア秩序－国内秩序と国際秩序の相互作用の観点から－」、討論者・中園和仁（広島大学）、司会・福原裕二（島根県立大学）
総括・大芝　亮（一橋大学副学長）
閉会の挨拶・江口伸吾

○北東アジア研究会2013年度第６回例会
【日　時】
2014年３月３日（月）13：00～15：00
【場　所】
講義・研究棟２階　会議室Ｂ
【報告者・テーマ】
岡本隆司氏（京都府立大学文学部准教授）
「モンゴルの『独立』と中国の『宗主権』」

○北東アジア研究会2013年度第７回例会
【日　時】
2014年３月13日（木）15：00～17：00
【場　所】
講義・研究棟２階　会議室Ｂ
【テーマ】
2013年度NEARセンター調査報告（１）延辺調査報告（２）モスクワ、サンクトペテルブルク調査報告

○外部評価を受けた研究業績
・井上治研究員が分担執筆した *In the Heart of Mongolia: 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912 edited by Jerzy Tulisow, Inoue Osamu, Bareja-Starzyńska Agata and Dziurzyńska Ewa*（ポーランド芸術科学アカデミー、2012年）の書評・紹介がフランスのモンゴル・シベリア研究センターが刊行する電子ジャーナル（年刊）*Études Mongoles & Siberiennes, Centrasiatique & Tibétaines* 43-44（2013）に紹介されました（評者はIsabelle Charleux）。詳細は、http://emscat.revues.org/2179　をご参照ください。

・江口伸吾研究員が分担執筆した『岩波世界人名大辞典』（岩波書店、2013年12月）が『朝日新聞』（2013年12月１日付）「本の舞台裏／辞典は正確さで勝負」で紹介されました。

NEAR センター市民研究員活動の一覧

○第２回市民研究員研究会の開催

【日　時】
2013 年 11 月 16 日（土）14：00 ～ 17：00
【場　所】
島根県立大学交流センター２階
　コンベンションホール
【内　容】
第１部　第３回 NEAR アカデミック・サロン
佐藤　壮研究員「北方領土隣接地域を歩く－根室調査報告－」
第２部　市民研究員の発表報告
①豊島秀明氏
「出雲大社『平成大遷宮』について」
②迫　義人氏
「実習生就学前教育からみえるもの」
③永井義人氏
「山陰地方における北東アジア地域との地域間交流を通じた地方自治体の国際政策－国家間対立に直面する地方自治体の対応に関する政治決定過程の分析－」

○第２回市民研究員全体会

【日　時】
2014 年 1 月 25 日（土）14：00 ～ 17：00
【場　所】
島根県立大学交流センター２階
　コンベンションホール
【内　容】
市民研究員研究報告会
①田中文也氏
「2013 年古代史サミット in 高千穂の成功と全国邪馬台国連絡協議会の設立について」
②岡崎秀紀氏
「チベット仏教探検先駆者・能海寛の最期を語った、フランス人麝香商人 G. ペロンヌを追って」
③阿部志朗氏
「絵図・地図の変遷からみる日本の近代化－松江市史　絵図・地図編の成果から」

○第３回市民研究員全体会の開催

【日　時】
2014 年３月１日（土）14：00 ～ 17：00
【場　所】
島根県立大学交流センター２階
　コンベンションホール
【内　容】
市民研究員と大学院生の共同研究成果報告
①「モンゴル国の低学歴貧困家庭からみた現代モンゴル都市社会－学歴と将来に関する親と子どもの期待を手がかりに－」（バダムサンブー ヒシグスレン〔北東アジア開発研究科博士前期課程１年〕、岡崎秀紀〔市民研究員〕）
②「大興安嶺におけるトナカイエヴェンキ人の生活変化と自意識に関する研究－森林内外生活の変化の実態を中心に－」（哈　麗娜〔北東アジア開発研究科博士前期課程２年〕、小菅良豪・若林一弘〔市民研究員〕）
③「中国朝鮮族における高齢者介護と家族・ジェンダー規範に関する社会学的研究－中国黒竜江省穆棱市Ａ鎮の高齢夫婦間介護を対象にして－」（孫　美玲〔北東アジア開発研究科博士前期課程２年〕、大津美津子〔市民研究員〕）

***NEAR　News*　第45号**
2014年3月発行
【編集発行】
島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697－0016
島根県浜田市野原町2433－2
Tel　0855－24－2375
Fax　0855－24－2383
E-mail:near-c@u-shimane.ac.jp
ホームページ:http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near